

解説



IT化の進展と「品質工学」誌のこれから (その1)

Progress of DX and the Future of the Journal (1)

出版部会編集委員会

参加者：矢野耕也 (日本大学), 植 英規 (福島工業高等専門学校), 河田直樹 (埼玉工業大学), 窪田葉子 (日本水環境学会), 坂本雅基 (花王), 杉山一宏 (東京都中小企業振興公社), 近岡 淳 (近岡技術経営研究所), 中島建夫 (元東亜合成), 細井光夫 (小松製作所), 水谷淳之介 (富山高等専門学校), 見原文雄 (日本能率協会コンサルティング), 茂木悠祐 (IHI), 山本桂一郎 (富山高等専門学校)

1. 本座談会の狙い

坂本 コロナ禍で生活や仕事の取り組み方が変わってきている。学会の在り方もこれまでとはまた違った形になりつつあり、編集委員会の活動や学会誌の在り方にも影響が出てくるように思う。また学会誌自体の変化として、今年から季刊化して年6回発行から4回発行になったことにより、役割が少し変わってくる可能性がある。一方で今後の国際化対応や、英文対応の要望が出ており、これからの時代に合わせた形に変化することを考える必要もある。以上のような観点でご意見をいただきたい。

2. 学会誌のIT化への対応

近岡 コロナ禍の影響でテレワークが増えて、集合しないでお互いに違う場所でPCの画面を見ながら仕事をする機会が増えていると思う。技術系の方で実験がある場合は別だが、それ以外のスタッフ的な仕事であれば、全部テレワークで済んでしまう。インターネットで情報を集めることや、ウェブ会議で議論することに慣れてきている。このような状況で、学会誌や書籍等、紙に印刷されたものは読まれなくなってきているのか、そうでもないのか、企業内の状況を皆さんにお聞きしたい。

中島 学会誌がIT化にどう対応するか、という議論になるのではないかな。

近岡 最終的には、情報を受ける側にとって、どういう形で提供されるのが一番良いか、ということになると思う。

中島 両方必要だと思う。紙媒体をやめることにはならないと思う。ただし、紙媒体とあわせて、学会ホームページでの情報発信を行っているが、それだけでいいのかな。やはり学会誌に並ぶようなものを作る必要があると思う。

矢野 新聞や書籍などを対象に、紙媒体か電子媒体かという議論は20年くらい前から行われていると思われるが、新聞のような速報性の必要なものは、部数減からの想定であるが、段々と電子媒体に移っているように感じる。雑誌等も同様かと思われるが、電子化というよりも休刊が多いように感じる。単行本などの電子化が進んでいるかということ、個人的にはそうでもないように感じるが、電子化の趨勢に合わせたいかねばならないと思われる。ただし電子版と紙媒体を同時に編集するのがどこまで現実的なことかは不明である。もし編集作業の量が倍に増えたとしたら、何らかの対策を考えないといけないように感じる。

坂本 これまでは学会誌とホームページは、会告等では連携はしていたが、これからはもっと密に連携することが求められるようになる。個人的には、論文を取り寄せるのもインターネット経由でPDFファイルを取り寄せることが多くなっていて、紙媒体で論文を読む機会はやはり減ってきている。